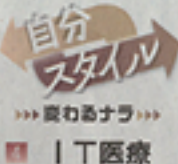


健康管理 ネット上で



あらゆるモノがインターネットにつながるIoTの技術を活用した住民の健康管理システムが、実用化に向けて動き出している。今、医療は大きく変わろうとしている。

県立医科大MBT研究所

梅田 智広 教授

改めて立ち上げようとしているスマートフォンの自動送信する仕組みという。コレステロール値が高めという奈良市の松田成成さん(69)は「体調が悪くなった時だけ医師に診てもらおうではないか、自分たちで普段のデータを把握しておくことも大切」と話

このシステムを手がけたのは、奈良市の県立医科大MBT(医学を基盤とするまちづくり)研究所教授、ベンチャー企業社長の梅田智広さん(69)。IoTを使って健康を管理すれば、通

院時間や医療費を抑えられ、家での時間が増える。ネットの普及と人間関係の希薄化は結びつけられがちだが、梅田さんは「ネットが人と人とのつながりを深める」と理想を語る。研究に取り組み、車輪力は、27年前の親類の死だった。

受験を控えた高玉町の私立3年の時、化学教師だった福島博敏さんから通った。放課後に化学の補習を受けていた。成績は伸び、レベルの高い問題を情熱を持って教えてもらった。これからの時代は再生医療だ。人工臓器を研究しなさい」と勧められた。

心臓病を抱えていた福島さんが突然、入院したとを耳にした。ただ、受験勉強最中だった梅田さんは余念ないまま、数か月が過ぎた。大学入試3日前、福島さんの死を別の教師から聞いた。30歳だった。「人間は本当に死ぬんだ」。死を初めて現実として受け止めた。通夜で訪れた父が「パパ、パパ」と声をたたく姿は、今でも忘れられない。



健康管理の道筋(上)へ、梅田智広(右)が説明する(奈良市)

常に健康をチェックすることで近い未来の状態で予測できれば、今取るべき最善の行動も変わる。「データから予測されたサイバー空間にいるもう一人の自分が、現実世界の自分に警告する」というイメージだ。そんな技術が実用化しても、魂を吹き込むのは人の思いといつとには変わりはない。梅田さんは「先生から託された道。歩み続けるのが思慮深くなる」との思いを胸に「技術で救える命がある」との信念、医療の可能性にチャレンジしていくつもりだ。

(大谷篤志)



健康管理の道筋(下)へ、梅田智広(左)が説明する(奈良市)

約6年前、母親病になっただ福島さんの長女から手紙が届いた。「父の思い出を聞いてほしい。父が死んだ時、僕はまだ中学生で、父の死を知らなかった。熱いものが涙に変わっていった。」

約6年前、母親病になっただ福島さんの長女から手紙が届いた。「父の思い出を聞いてほしい。父が死んだ時、僕はまだ中学生で、父の死を知らなかった。熱いものが涙に変わっていった。」

約6年前、母親病になっただ福島さんの長女から手紙が届いた。「父の思い出を聞いてほしい。父が死んだ時、僕はまだ中学生で、父の死を知らなかった。熱いものが涙に変わっていった。」